



花さき山

タイトル文字: 滝平二郎



育児コンシェルジュ

明野図書館では毎週、
火曜・木曜 10:00~14:30

上記の時間、お母さんやお父さんが図書館でゆっくり本を選べるように、育児コンシェルジュがサポートします！簡単な子育て相談もできますよ♪

フックスタートクラブ

毎週水曜日は視聴覚室開放 day♪

☆幼児向けおはなし会☆

8月2日、9日、23日 ⇒10:00~

☆ワンバット・エクササイズ☆

幼児向けの親子体操です。
体を動かして、心も一緒にリフレッシュ！
8月30日⇒10:30~

☆8月のおはなし会☆

場所：明野図書館 児童室
日時：8月5日（土）と20日（日）
11:00~11:30



夜の図書館探検 ~第2夜~

日時：9月10日（日）午後7:30~8:30
申込：8月8日（火）より受付スタート！
明野図書館 カウンターで受付いたします。
定員10名。小学4年生~6年生対象。
応募者多数の場合は抽選になります。

音読会



場所：明野図書館 視聴覚室
日時：8月1日（火）
11:00~12:00

気軽に発声練習してみませんか？
大人向けの音読会です。

もちろんお子さんも参加できますよ☆
8月のテーマは、『唱歌~夏~』！



夏休みだ！映画祭！

映画会上映予定作品♪

8月25日『おじゃる丸』 午前10:00~

26日『そして父になる』 午前10:00~

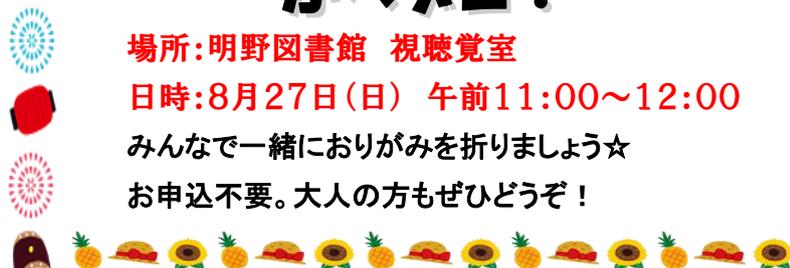
27日『花子 vs ヨースケ』 午後4:44~

映画祭はチケット制になります。
チケットは8月1日より配布スタート！
明野図書館 カウンターにてお申し込みください。
チケット無料・どなたでもご覧いただけます。
※27日の映画のみ、ホラー映画の為、
小学生以下の子は、保護者と一緒に観てね☆



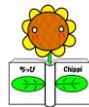
かべテコ！

場所：明野図書館 視聴覚室
日時：8月27日（日） 午前11:00~12:00
みんなで一緒におりがみを折りましょう☆
お申込不要。大人の方もぜひどうぞ！



《8月の特集コーナー》

場所：明野図書館 カウンター前「特集コーナー」
テーマは「貸出ゼロ本」



旅に魅せられて

トバイアス・スモレット著『フランス・イタリア紀行』の翻訳

根岸 彰

日常生活を離れた旅の空の下にいるときに最高の時間である。その旅程もしっかりとは立てない。いつも一人旅だが、それだけ深い旅情と旅愁が感じられ、しばしば感動的な瞬間に立ち会うことができる。今年二月にはバンコク、アユタヤ、ロブリーの寺々を訪ねた。アユタヤでは仏教寺院の遺跡を自転車で回った。野良犬と屋台が多く、暗い灯がともった夕暮れの街には、半世紀も昔の日本の、あのゆったりとした時間が流れていて、懐かしさが込み上げた。四月には桜のあでやかな金沢周辺を歩いた。古都の情趣深い茶屋街の石畳をヨーロッパからの旅人も踏みしめていた。福井の一乗谷遺跡、越前大野、桜の丸岡城にも足を延ばした。六月には女峰山に単独登山した。他に誰もいない寒い唐沢避難小屋泊まりで十時間以上の困難な山旅だったが、山麓の靈氣に触れて心身が洗われた。山頂からの眺めは絶景だった。PC にすべて依存する現代という乾いた時代には、しみじみとした旅情をたたえた旅行書をもっと読みたいものである。松尾芭蕉は役行者のような想像を絶する大旅行家だった。旅によって芸術的感性が磨かれた。あるとき、鳴子温泉～尿前の関跡～最上町塚田の封人の家（有名な馬の句をここでつくった）～山刀伐峠（なたぎりとうげ）と山中の格好のハイキングコース（尾花沢への奥の細道）をたどった。またあるとき、芭蕉の死出の旅路となった暗峠（くらがりとうげ）を越えた。近鉄の元山上口駅から千光寺を経て、春には見事な花の咲く椿の並木が長く続く山道を歩き、昔の風情を残す暗峠に出る。峠から牧岡神社（ひらおかじんじゃ）までの山中の道はすさまじい本邦随一の急坂で、ここで「菊の香やくらがり登る節句かな」の句を詠み、峠越えのおよそひと月後に大阪の御堂筋近くで亡くなる芭蕉が歩いたとは信じられないほどなのである。イザベラ・バードの『日本奥地紀行』には明治期の旅と当時の風物が描かれている。心細い女の旅だったが蝦夷地を含め北日本を回る。日光の田母沢御用邸近くの、今は金谷ホテル歴史館になっている旅館に泊まる。大内村など会津西街道をたどり、高田、坂下から新潟に出て、新庄、金山から秋田に出る。イザベラ・バードの訪問記念碑が建つ金山は豊かな水と美しい風光に恵まれた昔ながらの街である。『菅江真澄遊覧記』は江戸期の旅日記である。真澄の関心は出羽、陸奥、蝦夷地などの辺境の人びとに向けられ、その生活を詳しく描く。図版も多い。『泉光院江戸旅日記』は修行僧が全国の農山村を、托鉢などをしながら、見聞したことをまとめたものである。これらの他にも、たとえば鈴木牧之の『秋山紀行』、宮本常一の膨大な著作集など、日本にもいくらかでも特色のある旅行書はある。私事であるが、半年ほど前に諏訪市の出版社、鳥影社から『フランス・イタリア紀行』を上梓した。原作者は十八世紀のイギリスの作家トバイアス・スモレットである。当時流行したグランド・ツアーという旅の実態を垣間見せてくれる。才気あふれての脱線話も多いが、鉄道敷設以前のヨーロッパ社会の百科全書的な報告書になっている。本書は欧米では名高いものだが、翻訳困難なので長らく邦訳されなかった。直訳では意味不明なのでぎりぎりの意識をしたところがかかなりある。この本により日本ではこれまでほとんど注目されなかった『紀行』も日の目を見らると思う。それにしても一冊の書物を世に送ることがいかに大変であり、かつ貴重なことかと思ひ知らされた次第である。

参考文献『イザベラ・バードの旅』（講談社学術文庫）

（ねぎし あきら／旅行書探訪家）